

## 館山支部だより Vol.112



秋桜 コスモスフラワー  
意欲の色があるとか・・・  
＜9月初旬 拙宅の庭先にて＞

長いコロナ禍の中で最大の第7波が峠を越え下火に向かいつつあるようですが一向に終息の気配がなく、専門家の間では第8波の可能性すら指摘されております。大正時代に2年間にわたって世界中に猛威を振るったスペイン風邪が想起されますが、それを上回るようなコロナ禍の勢いに改めて脅威を感じる次第です。(同じことを繰り返すようですが)今までの努力の蓄積とともに工夫を凝らしてこの難局を乗り切ろうではありませんか。＜川村 記＞

## 支部の活動概要

## 《8・9月活動実績》

9. 16(金) 館山航空基地開隊69周年記念式典  
(自衛隊協力関係団体の各代表者が参加)  
9. 24(土) 支部役員会(コミセン)

## 《10・11月活動予定》

- 10.10(月) 館砲校予備学生戦没者慰霊祭(安房神社)  
11 月 館山航空基地殉職隊員慰霊祭(期日等未定)  
11.26(土) 支部役員会(コミセン)

## 館山航空基地開隊69周年記念式典 9/16(金)14:00～14:30

2019年秋の台風15号の被害と2020年以降のコロナ禍の影響で、基地の開隊記念行事は隊員のみに限定したセレモニーでしたが、今回4年ぶりです。部外者(来賓等)が参加する形で行なわれました。ただ部外の参加者は、歴代群司令のほか自衛隊協力関係団体の代表者に絞られています。式典は、国家静聴(伴奏)に始まり、群司令式辞に続いて自衛隊協力会会長の館山市長と南房総市長の祝辞が述べられ、最後は第21航空隊のヘリコプター3機編隊による祝賀飛行で締めくくられました。なお今回の案内状の中で、「開隊記念の趣旨」について「館山航空基地がS28. 9. 16に海自初の航空部隊として開隊されて以降、苦難の時代に海上自衛隊が再建された歴史やこれまで先人が築き上げてきた伝統を隊員が改めて考える機会であるとの認識に至り、記念式は隊員一同と関係者のみで執り行う。」旨述べられており、今後を見据えた措置等が講じられるものと思います。＜支部長＞

## トピックス

斎藤紀一郎会員 句集「神杉」を出版

6月初めの房日紙に句集「神杉(しんさん)」上梓(じょうし、出版)の詳細な記事が載っておりました。昭和53年、大湊航空隊単身赴任中に俳句を始めて以来全国各地の勤務で句作を続け、退官後、館山で愛妻に先立たれ、自身は大病を克服して句作一途に歩んだ人生や句集の出版に至った経緯等の紹介記事でした。なお斎藤会員から投稿(右欄)がありましたのでご覧下さい。＜川 村記＞

## 新入会員紹介

7月期 青木 重夫会員(海、館空基)

自衛隊での勤務を全うされ 隊友会への即日入会を歓迎致します。

## レクイエム

8/13 杉田 義勝会員ご逝去(海、享年88歳)

隊友会会員として長年のご理解ご協力有難うございました。  
謹んで哀悼の意を表しご冥福をお祈りいたします。＜会員一同＞

＜支部連絡窓口＞  
千葉県隊友会館山支部  
事務局(代表) 川 村 巖  
〒294-0032 館山市笠名1357  
TEL 0470-22-0230

## 寄稿「自衛隊俳句誌「柝の芽」の今昔」

皆様、自衛隊俳句誌「柝の芽」をご存じでしょうか。今から20年ほど前まで現役だった方は目にされたと思いますが、それ以降の方は知らないと思います。なぜなら20年ほど前までは、全国各地の厚生隊(科)に各2冊配付されていたからです。ところが民主党政権(H21から24年)以降は配付が停止されたとか。

私が柝の芽を知ったのは、S53. 5月頃、大湊航空隊に単身赴任中、何かリラックスできるものを探していた時、共済売店に閲覧用として置かれてあった「柝の芽」を見付けました。陸奥(みちのく)の5月は、百花繚乱、山菜も豊富な季節です。素晴らしい自然の誘いもあって、早速、柝の芽会員となり、句作を始めました。当時の会員は、殆どが陸海空の自衛隊員でした。因みに大湊から私が、木更津からは故遠藤真砂明(正明)氏が投句していました。

この柝の芽の前身は、海上自衛隊の「青潮(あおしお)」でした。これを全自衛隊の俳句誌にしようという気運が高まり、青潮会選者の富安風生(とみやすふうせい)に新誌名と揮豪をお願いし、S31年に全自衛隊誌「柝の芽」の誕生に至った経緯です。富安風生(以下「風生」)は、東京帝国大学法科を出て通信省に入りS12年に退官。現役中より高浜虚子に師事、S3年には若葉を創刊、その句業によりS50年に芸術院会員に推されています。

風生はS51年90歳になるまで18年間にわたって柝の芽選者として、柝の芽の緑蔭なすに至るまで指導に精魂をそそがれるとともに柝の芽創刊10周年記念号の巻頭句も詠んでいます。このように風生は、柝の芽の名付け親、育ての親でありました。

現在の柝の芽会員は、殆どが自衛隊OB・OGでこれに一般の人が加わっています。令和4年度柝の芽誌上俳句大会では、「会員のほか家族、友人及び一般の方の投句を歓迎します」となっています。私が初めて会員になったS53年頃は、現役自衛隊員で占められていた柝の芽会も随分と様変わりしています。

現在私が所属している柝の芽三宿支部が本年40周年を迎えるに際し、記念行事の一環として、柝の芽掲載句から自選しての句集編集が企画されました。私も自らの句を顧みる機会と考え、この4月に句集「神杉(しんさん)」を上梓しました。館山、南房総、鴨川の各市立図書館に各一冊寄贈させていただきましたので、お立ち寄りの際にでもご覧いただければ幸甚です。

《館山柝の芽同人 斎藤一向(紀一郎)会員、海》

＜コメント＞斎藤紀一郎会員との出会いは、私がS41.11月に第101航空隊(列線)に着任した時で、HSS-2型ヘリが配備されてまだ日も浅くASE(自動安定)システムのトラブルに悩まされていた時代でした。専修科を修業していち早くASEをマスターした当時の斎藤3曹は、支整勤務でしたがパイロットの信望も厚く飛行作業が終わる都度お呼びがかかるなど、新米の私にとってはまさに地獄に仏?の存在でした。年が明け3. 1日付でHSS-2型ヘリの大湊配備に伴い、斎藤3曹とともに(酷寒中の)大湊へ転勤することになりましたが、この時、世帯道具を積み込んだ貨車が一緒だったのも奇遇でした・・・以下割愛。

贈られた句集「神杉」の中から、(門外漢の)私が特に感銘を受けた1～2句を紹介します。

＜川村 記＞

「釜伏(山)の紅葉下りて里の秋」(S54年)

「冬に入る今日為すことをなし終えて」(R3年)

## 事故の教訓から生まれた「館砲校の落下傘訓練用プール」

8月末の房日紙に陸自の第一空挺団(習志野)が保田海岸で海上降下訓練を行った記事が載っていた。「緊急事態」を想定した訓練で平成元年に始められ今回で29回目と言う。記事によると、時速120kmで飛行するヘリコプターで、340mの高度から隊員がパラシュートを開いて降下、約60秒後、“着水直前”にパラシュートを切り離して海上に着水すると言う。ここで館山海軍砲術学校(「館砲校」)跡地に残された「訓練用プール(写真)」、この用途・建設目的を巡って諸説紛々、「落下傘降下時に(誤って)着水した場合に備えるための訓練用プール」と言うのが通説になっているようであるがその真偽のほどは定かでない。以前、本紙で紹介したことがあるが、今回の陸自の訓練に“確証”を得たので、このプールの用途等について再検証してみることにする。

## 落下傘降下訓練中の出来事

日米開戦直前の9月中旬、突如、館山航空基地で1500名の特別陸戦隊が編成され、海軍として初めての落下傘訓練が始められた。日米関係の悪化とともに日米交渉決裂という最悪の事態を憂慮した海軍としての決断だったのであろう。訓練生のみならず教官陣にとっても初めての航空機からの作戦降下訓練が始められた。この訓練の最中、航空機搭乗信号員のミスにより館山湾に降下する羽目になった降下隊員の一人が、海中で落下傘を切り離すことができず、海水を含んだ落下傘とともに水没するという事故が発生した。当時の横須賀鎮守府広報には殉職隊員の海軍葬(館山基地)が告示されている。この事故に鑑み、陸戦隊指導部から「降下時、着水の事態が避けられない場合には、海面上8～9mで素早く傘体(落下傘)を脱ぎ捨てるべし」との“窮余の一策”が厳命された。

## 館砲校における落下傘教育“事始め”

ところでこの時期、館砲校の落下傘教育の準備状況はどうだったのだろうか。館砲校が開校したのは日米開戦の年の6月1日のことであり、その1週間後に海軍省から「飛行特技員の訓練に関する通達」が出された。「飛行特技員」とは落下傘特技員のことである。この通達は、翌17年度からの教育開始に備え、施設整備や訓練器材、教育資料等の準備を促進するものであった。

肝心の教官要員であるが、前年の11月に極秘海軍大臣命令「第1001号実験」が令され、横須賀航空基地に二十数名の士官・下士官兵クラスが集められた。作戦用落下傘の開発から降下法の研究等が矢継ぎ早に進められ、試行錯誤の連続、降下実験での犠牲者も出る中、作戦用落下傘の完成にまでこぎつけた。しかし日米関係の悪化により実験は中止され、降下を経験した約80名の研究員たちは開校直前の館砲校勤務を発令された。落下傘教育のための教官要員であったことは言うまでもない。

単に落下傘を装着して着水するための訓練であれば、これほど大袈裟な設備は必要ない。近くの相浜や布良の岸壁で十分用が足せることである。館山基地での急速錬成訓練中の殉職事故の教訓が、館砲校の次年度施設整備計画(落下傘教育)に急遽反映されたものにほかならないのである。

《自称地域史探索マニア その36》



＜落下傘降下訓練用プール跡＞  
(現在、関東財務局が管理)  
○サイズ(広さ)は50mプール。左側半分が急傾斜で水深が増している。  
○手前に鉄塔の台座と思われるコンクリートブロック(1. 5m立方)が多数見られる。  
○訓練生は、ダミーの落下傘を装着して鉄塔(10数m高)から一人ずつ降下し、水面上8～9mでダミー傘を切り離す。  
訓練生にこのタイミングを身体で覚えさせるのが、この「鉄塔を備えた訓練用プール」の目的と言えよう。(筆者推定)